



〆
奥^{おく}
の
細^{ほそ}
道^{みち}

ㇿ

松^{まつ}
尾^お
芭蕉^{ばしょう}
と



<はじめに>

私のおじいちゃんは昔切手を集めるのがし
味でした。今年に入、て、おじいちゃんは
たくさん集つめていたけど、もう使わない
しみんなて使、てね」と言、て、集めてい
た切手を私たち家族にプレゼントして
くれました。もちろんもたいたく、て使
えず、大切にファイルに保存していました。
国語で習、った俳句の切手があること
に気づき、今回『松尾芭蕉の奥の細田
道』について言周、べてまとめてみよ
うと思、いました。

本名 … ^{まつお おねふさ} 松尾宗房

生、ぼ、う、年 … 1644年

～1694年

出身地 … ^{い、が、し}伊賀上野

(三重県伊賀市)



松尾芭蕉

「奥の細道」は、東北や北陸の歌枕、名所旧跡を訪ねてまわった紀行文です。いつうの紀行文かというと、訪ねた場所や旅の行程、行く先々でのできごとなどを記していますが、「奥の細道」は、各地でよんだ俳かいをメインにして、みがきぬいた文章がつづられています。書かれた俳かいには全部で五十一部。この旅の中で、世素は理想とする俳かいの形「風雅」の世界を追い求めていました。そして、多くの俳かいをよむ中で、確立していききました。何年もかけて文章をみがいて書いた本を、芭蕉の死後に弟子連が出版してくれたそうです。300年以上経った今でも、俳句の一番大事な本として、世の中の人に読まれています。だから松尾芭蕉は俳句の神様だと思います。

《地义》



元禄二年(1689)

旧暦	陽暦	
3月27日	5月16日	江戸・深川を出発する
4月 1日	19日	日光東照宮参拝
3日	21日	黒羽到着。13泊する
20日	6月 7日	白河の関を越え、陸奥へ
22日	9日	須賀川到着。7泊する
5月 4日	20日	仙台到着。4泊する
9日	25日	松島遊覧
13日	29日	平泉へ。中尊寺参拝
17日	7月 3日	尾花沢到着。10泊する
27日	13日	山寺・立石寺参拝
6月 3日	19日	最上川を舟で下る
6日	22日	月山・湯殿山へ登山、参拝
10日	26日	鶴岡到着。3泊する
13日	29日	酒田到着
16日	8月 1日	象潟到着
18日	3日	酒田へ戻る。7泊する
7月 4日	18日	出雲崎到着
15日	29日	金沢到着。9泊する
27日	9月10日	山中到着。8泊。曾良と別れる
8月14日	27日	敦賀到着
21日	10月 4日	大垣到着
9月 6日	18日	大垣を発ち、伊勢へと向かう

山中出発から大垣到着までは推定

155日間2400kmの道のりでした。「奥の細道」というタイトルの意味は、東北への細い旅の道という意味です。奥は東北地方、細道は、心細い、たよりにならないような道ということです。

ゆくはる
行春や鳥啼き魚の目は泪

朱子語：行春

江戸 千住

もう春も過ぎさうとしている。
春の別れのさかしさに心をもちない
鳥や魚までもが泣いているようだ



あらたふと青葉茗葉の日の光

朱子語：茗葉

栃木県日光

ああなるとかといことだ。
初夏のみずみずしい葉に
明るい光がさして美しい。



野を横に馬ひき向けよと
ほととぎす

朱子語：ほととぎす
栃木県那須

広々した野原を横切るように
馬の進路を変えてくれ、
ホトトギスよ



田一枚植て去る

朱子語：田植え

栃木県那須

柳かな

柳のかげで思いにふけってる間、
田植えをする女性たちが田一枚
植えて去っていった



世の人の見付め花や

軒の栗

木子語栗の花、福島県須賀川

世の中の人の目にもとまらぬ

くりの花。世ぞくきはなれてひっそり
生きる主人は、静かで高潔な美し
がある



早苗とる手もとやずり

昔しのぶ摺

木子語早苗 福島県福島市

田植えの手元は今ほもうしない
「しのぶずり」という染物で布を
こすっていた昔の様子かしのばれる



あやめ草足に結ん草鞋

の緒

木子語あやめ草 宮城(仙台)

たん、この節句の日に、しょうぶやわりに
旅の安全をいのち、ぞうりの緒に
あやめを結んで出発しよう



夏草や兵どもが夢の跡

木子語夏草

今は夏草ばかりのこのあたりに、
かつての栄華があった。
武者たちの必死のたたかきも、
今となってははかない夢のようだ



しずめ
閑さや 岩にしみ入る 蝉の^{せみ}声

季語：せみ 山形県不立岩寺

ああなんと静かなことだろう
周囲の岩々にしみ入るようにひびくせみの
声が、かえってこの辺りの静けさを
まわらせている



さみだれ
五日雨を集めて早し 最上川

季語：五月雨 山形県最上川
ふねの上

梅雨の長雨が集まって
もがみ川が早く流れているなあ



雲の峰 幾^{いく}つ崩^{くずれ}て 月の山

季語：雨雲の峰 山形県月山^{がつさん}

空にそびえる入道雲がいくつも
くずれおちて、その後にのこった雲が
美しくゆう大な「月山」になった
のだろう。



きまがた
象潟や 雨に西施が 合^あ歓^{かん}の花

季語：ねぶの花 秋田県象潟

雨にけむる象潟の中でしらとりと
ぬれを嘆くねぶの花は、まるで
うれいにしずむ西施が物鬼はに
ふけているようだ



荒波や佐渡に横たふ天河 あまのかわ

季語：天河(秋) 新潟県出雲崎

暗くあぐさる日本海のむこうには、
佐渡島が見える。空をおおぎ見ると
美しい天の川が佐渡の方へ大きく
横たわっている。



わせ か 早稲の香や分入右は わけいる

ありそつみ 有磯海

季語：わせの香(秋) 富山県

富山わん

早めに実った稲の香りがする。
この道を分け入って右に行けば
かの有名な有磯海だ。



あかあかと日は難面も つれなく

秋の風

季語：秋の風

石川県

こりつける夕日はきびしいけれど
ふさぬける風はすでに秋のものをだ



石山の石より白し秋の風

季語：秋の風

石川県小松市

寺の境内にはたくさんのお石が
あるが、それより白く感じる秋の
風がふいているよ。



月清し遊行の持てる砂の上

季語：月（秋）

福井県つるが市

気土神宮



月が清らかな光を放っていることだ。歴史上の遊行人が持ち運んだと聞く神前の白砂の上には。

さびしさや須磨に勝ちたる

浜の秋

季語：浜の秋

福井県つるが市

色ヶ浜



源氏物語でさびしさのまわみと

されるすまの秋よりも、目の前の

色の浜の秋のほうがはるかにさみしく心にしみる。

蛤のふたみに別れ行秋ぞ

季語：行春

ゆくあき



しっかりとくついているはまぐりのふたと身かはなれるようにならう。おいしいあなた方と別れて伊勢へ行きます。秋も終わりに近づき、別れのさびしさがいっそう身にしみず。8

<参考>

「松尾芭蕉と曲亭馬琴」

国士社

インターネット

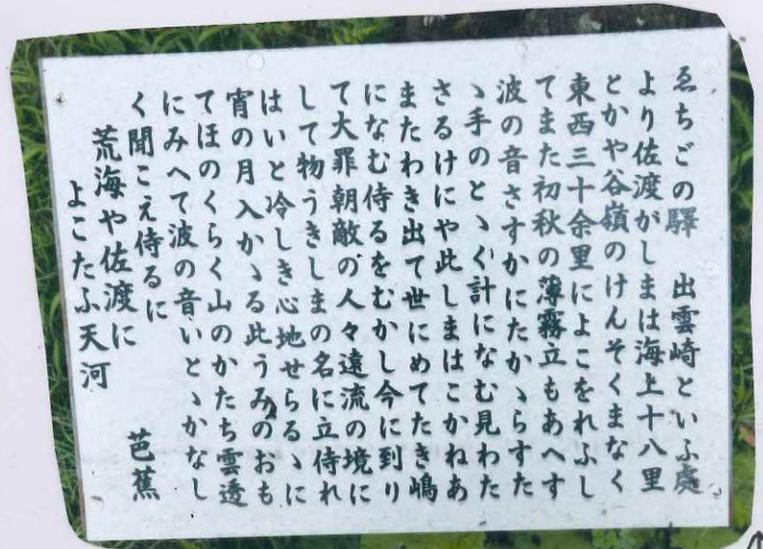
「芭蕉公羽けんしう会」

『出雲山崎』にいじと言われました。(2006年7月31日)

『荒波や佐渡によこたの天河』
を詠んだ地です。

新潟のばばの家に帰った日に、
家族で行きました。

思ったよりも芭蕉像が小さく感じました。
ここで名句が生まれたと思うと、
なんだか芭蕉ているような感じ
がし、俳句を詠みたくなりま
した。



「銀河の序」句碑：昭和9年建碑



芭蕉像



ばばと。妹と。



↑ 夫令負の里にある芭蕉像。
同じポーズをしてみました。

＜おわりに＞

私は、芭蕉が155日かけて整備のされ
ていない道を2400kmもか
けて歩いたことがすごいと思
いました。私も、今度100kmを歩
く機会があるので芭蕉みたい
にがんばりたいです。じいそ一
緒にお出かけできてよかったです。